

『Durbodhālokā』について

磯 田 熙 文

『Durbodha (-ālokā)』(Toh No. 3794, Ota No. 5192) は、Haribhadra の『Abhisamayālaṃkāropadeśa-śāstra Sphuṭārthā』に対する復注のうちの 1 つであるが、〈Abhisamaya〉文献中に占めるこの書の位置は必ずしもなお明らかではない。そこで、この解明の手繋りとして、先ず、『Durbodha』八章(八現観)の各章毎に引用されている経論を検索し、その引用の 1, 2 の個処の文脈を通して、本書の性格の一端をも伺いたい。

先ず、著者名について確かめておきたい。Bu ston は、まだ Shar 寺に移る前、Khro. phu 寺において Haribhadra の『Sphuṭārthā』に対する注解『Luñ gi sñe ma』を書いたとされるが¹⁾、同書はこの『Durbodha』の著者を Ku-la-nta としている²⁾。しかし、これよりも後の著作といわれ、種々問題をかかえた『プトンの仏教史』の目録によると、〈Gser gliñ pa, Chos kyi grags pa (Suvārṇadvīpa の, Dharmakīrti) のお作りになった『Rtogs dkañi snañ ba (Dur(ava) bodhālokā)』; Rin chen bzañ po の翻訳)³⁾と記されている。この Kulanta と Dharmakīrti を記す 2 資料が、少くとも『Durbodha』の著者名に 2 つの source のあったことを伝えている。

Tsoñ kha pa も、同じく『Sphuṭārthā』に対する注解『Gser hphreñ』に、『Durbodha』を引用する場合に、Gser gliñ pa 以外に、Rigs byin あるいは、Ku-lan-ta の名前を用いている⁴⁾。ただ、サクヤ派の Go rams pa は、『Sphuṭārthā』の注釈者の名前を挙げる際に、〈Gser glin pa, Prajñākaramati, Kulenta, Ratnakīrti 達が注解をお作りになった〉⁵⁾と述べて、Gser gliñ pa と Kulenta を別人として挙げているが、前二者に従う限りこれは誤りであろう。いずれにせよ、Bu-ston, Tsoñ kha pa 共に、その『Sphuṭārthā』注解によれば、『Durbodha』の著者を Gser-gliñ pa, Kulanta (Rigs-byin) と考えていたことが知られる。ところで、Atiśa は自著である『Bodhimārga-pradīpa-pañjikā』に、Gser gliñ pa の名を自身の師として 6 回引いているが、Dharmakīrti などの名前を付してはいないし、また、この『Pañjikā』には、『Durbodha』からの直接の引用と思われる文も見出しえない⁶⁾。

いずれにせよ、〈チベット大蔵経目録〉のデルゲ、北京兩版共に著者は Chos kyi grags dpal (Dharmakīrtiśrī) としているが、この名前は異名の一にすぎず、また、Atiśa の師としての人物と、『Durbodha』の著者を結びつける名称は、〈Gser gliñ pa (Suvarṇadvīpa の)〉のみである。

次に、本書に引かれる経論——ほとんど韻文であるが——を判る限り検索し、ある意味での全体像を見ておきたい。

1. 『Dbu ma la hjug pa』(=Madhyamakāvatāra, IV, 79) (D.142a³, P.163a⁵⁻⁶) 『hdi ñid』(=IV, 4) (D142a⁴, P.163a⁶⁻⁷)
2. Bcom ldan h̄das kyis; sans rgyas bcom ldan bsam mi khyab // sañs rgyas chos kyañ bsam mi khyab // bsam mi khyab la dad rnam kyī // rnam par smin paḥaṇ bsam mi khyab/(D. 144a¹, P.165a⁶⁻⁷)
- 3-i, Tshad ma rnam h̄grel mdsad pas (=Pra (māṇa)-vā (rttika), IV, 108, 54) (D.145a³⁻⁴, P.166b³⁻⁴)
- 4-i, H̄phags pa lhaḥi shal s̄ña nas (=Catuḥśataka, XII, 18) (D.145a⁵⁻⁶, P.166b⁵⁻⁶)
5. 『De bshin ḡsegs paḥi gsañ baḥi mdo』(cf. Toh No. 47, 105a, Ota No. 760 (3), 119a⁸) (D.147a^{7-b1}, P.169a⁵⁻⁶)
- 3-ii, /(D.148a¹⁻², P.169b⁹) (=Pra, Vā.I, 214)
6. 『Rnam par b̄sad paḥi rigs pa』(=Vyākhyāyukti, I, D.30b, P.33b⁵⁻⁶) (D.148b³, P.170b²⁻³)
7. 『Gser ḥod dam pa』(=Suvarṇaprabhāsa II, 27ab) (D.152b⁶, P.175a¹)
8. slob dpon Phyogs kyī glañ poḥi shal s̄ña nas (=Prajñāpāramitāpiṇ-ḍārtha k. 57) (D.153a^{1-b1}, P.175b²⁻³)
- 9-i, 153b^{7-4a1}, P.176a⁴⁻⁵) (=Mahāyānasūtrālaṃkāra, IV, 1)
- 9-ii, 『Mdo sde rgyan』(=IV, 2, 3a, b) (D158a^{7-b1}, P.181a¹⁻²) [以上, 第1章]
1. 『Chos mñon pa』(cf. Abhidharmakośabhāṣya VI, 19b, c) (D.206b, P.234a³⁻⁴)
- 2-i, (D.208b⁷, P.236b⁴⁻⁵) (=Pra, Vā. 1, 7)
3. ñe bar gnod phyir yañ dag par // gañ shig smras gyur de ñid brdsun// bden dañ bden min don ci yin // gshan don byed gañ de bden yin/(D.212a¹⁻², P.240a⁴⁻⁵)
- 2-ii, Rnam h̄grel mdsad pas (=Pra, Vā. III.285) (D.213a¹⁻², P.241a⁵⁻⁶)

3. 『Mdo sdeḥi rgyan』 (=XII, 3) (D. 213a²⁻³, P. 241a⁷⁻⁸)
- 2-iii, Rnam ḥgrel mdsad pas,
 rnam par rtog pa gñis po dus gcig min (D. 213b⁴, P. 241b⁸-2a¹)
- 2-iv, (D. 214b²⁻³, P. 243a²) (=Pra, Vā. I, 35)
- 2-v, (D. 215a⁴⁻⁵ P. 243b⁵) (=Pra. Vā. I, 34)
- 2-vi, Rnam ḥgrel mdsad pas (=Pra. Vā. III, 4) (D. 215a⁷, P. 244a⁸)
- 4-i, 『Dbu maḥi rgyan』 (=Madhyamakālamkāra, k. 67) (D. 215a⁷-b¹, P. 244a¹)
- 4-ii, 『Dbu maḥi rgyan』 (=k, 83), 『de ñid (k. 84)』 (D. 215b⁶⁻⁷, P. 244a⁸-b²)
5. 『Dbu dañ mthaḥ rnam par ḥbyed pa』 (=Madhyāntavibhaṅga, II, 17) (D. 216a¹, P. 244b²⁻³)
6. gañ gis ḥdren paḥi ñes ḥbyuñ baḥi // dad pa bshon pa mchog yin no // de bas dad paḥi rjes ḥbrañ ñid // blo ldan mi yis brten par gyis // dad pa med paḥi mi rnams la // dkar poḥi chos rnams mi skye ste // sa bon me yis tshig pa la // myu gu sñon po ji bshin no / (D. 216b⁶⁻⁷, P. 245b²⁻³)
7. slob dpon Nā-gar-dsu-naḥi shal sña nas (=Mūla-madhyamaka-kārikā, XXV, 20) (D. 217a³, P. 245b⁵)
8. stoñ ñid don ni mi śes par // thos pa rnams la ḥjug byed ciñ // gañ dag bsod nams mi byed pa // skyes bu tha śal de dag brlag / (D. 218a³, P. 246b⁸) [以上, 第4章]
- 1-i, (D. 220b, P. 249b⁷⁻⁸) (=Abhidharmakośa, III, 73, 74)
- 2-i, Tshad ma rnam ḥgrel mdsad pas (=Pra. Vā I, 221) (D. 222b³⁻⁴, P. 251b⁸-2a¹)
- 2ii, (D. 223b, P. 252b⁸) (=Pra. Vā. III, 247)
3. rnam rtog ḥdi dag rañ ñid ni // ma rig ño bo ñid du rtogs // gañ phyir dañ gi rnam pa ni // phyiḥi ño bor sgro btags ḥjug (D. 226b, P. 256b²⁻³)
4. rnam pa tshad ma med phyir dañ // mi (P. ma) rig phyir na cig (P. gcig) śos min / (D. 231a¹, P. 261b¹⁻²)
5. (D. 231a², P. 261b²⁻³) (=Triṃśikā, k. 27)
6. (D. 231a³, P. 261b⁴⁻⁵) (=Pramāṇaviniścaya, I, 38)
7. (D. 231a⁵, P. 261b⁷) (=Yuktiṣaṣṭikā, k. 19)
- 2-iii, (Pra. Vā. III, 285) (D. 231b¹, P. 262a³) = 第4章 2-ii.

8. (D. 232a⁷, P. 263a³⁻⁴) (=Mahāyānavimśikā, k. 9)
9. 『Dbu mahi rgyan』 (=k. 86) (D. 232b⁵⁻⁶, P. 263b)
10. 『Rnam hgrell』 las; lan ḡgaḡ thabs ni rnam pa shig // dus kyaḡ maḡ du ḡdi yis ni // bslabs pas de la yon tan daḡ // ḡes pa bsal bar gyur pa yin / (D. 232b⁶⁻⁷, P. 263b)
11. /mya ḡan ḡdas min mya nan ḡdas // ḡḡig rten mgon gyis bstan pa ni // nam mkhaḡ byas paḡi mdud pa ḡdi (P. ni) // nam mkhaḡ ḡid kyis bkrol (P. dkrol) ba yin / (D. 233b⁵⁻⁶, P. 264b⁴)
- 1-ii, (D234b¹⁻³, P. 265a^{8-b}) (=Abhidharmakośa, III, 21-24)
12. /sa brgyad rnam pa ḡḡis ḡbrel daḡ // ḡcig brgal soḡ shiḡ ḡoḡs nas ni // ris mi mthun par gsum par ḡhro // thod rgāl gyi ni sḡoms ḡjug yin / (D. 235b⁷, P. 267a²)
13. rnam par rtog pa gsum gyis ni // legs paḡi lam ni rnam gsum la / (D. 236b³, P. 267b⁷⁻⁸) [以上, 第5章]
1. /ston paḡi dam chos rnam ḡḡis te // luḡ daḡ rtogs paḡi bdag ḡid can // ḡdsin daḡ de ni ston pa daḡ // bsgrub par byed pa ḡid dag go / (D. 243a⁶, P. 275a⁵⁻⁶) [以上, 第6章]
1. /tshogs daḡ chos kyi sku dag daḡ // ḡgro baḡi don ni mdsad pa yis // saḡs rgyas thams cad mḡam pa ste // sku tshe rigs daḡ tshad kyis (P. kyi) min / (D. 250b^{8-1a}, P. 284a⁷⁻⁸)
2. 『Mtshan yaḡ dag par brjod pa』 (Nāmasaḡḡiti) las / saḡs rgyas-sku bḡaḡi bdag ḡid can / (D. 251a⁴, P. 284b⁵⁻⁶)⁷⁾
3. 『Tiḡ ḡe ḡdsin gyi rgyal po』 (=Samādhiraḡa, XXXV, 5) (D. 252a², P. 285b⁶⁻⁷)
4. sdug bsḡal phyin (P. phyir) ci ldog blo daḡ // srid pa kun nas ḡchiḡ baḡi rgyu // ḡgro ba ḡaḡ la de med na // de ni skye bar ḡgyur ma yin / (D. 252a⁴, P. 286a²)
5. 『Chos yaḡ dag par sdud paḡi mdo』 (Toh No. 238, Ota No. 904) la, ḡdul byaḡi lus ni chos kyi skuḡi spyod yul. (D. 252a⁴⁻⁵, P. 286a³)
6. 『De bshin ḡseḡs paḡi ḡsaḡ ba bstan pa』 (Toh No. 47 Ota No. 760 (3)) la sogs paḡi mdo (D. 252a⁶⁷⁻, P. 286a⁵⁻⁷)
7. sems can rnam kyi ḡrol ba las // dḡaḡ baḡi rgya mtsho ḡaḡ yin te //

de ñid mthar thug ma yin nam // ro bral grol (P. groñ) bas ci shig
bya/(D. 252b⁵⁻⁶, P. 286a⁷⁻⁸)

8. Śānta-devaḥi shal sñā nas (=Bodhicaryāvatāra, IX, 37-38) (D. 252b⁸-3a⁴, P287a²⁻⁴)

9. 『Mdo sde rgyan』(=XI, 54) (D. 253a³⁻⁴, P. 287a⁷⁻⁸) 〔以上、第8章〕

以上で、出所を未だ比定しえないものも含めて、所引の経論をほぼ網羅しえたと思われるが、これらのうちで、Dharmakīrti の引用が14回と最も多いことが、著者の異名の一つ、Dharmakīrti (-śrī) との関わりもあり注意を引く。

次に、〈解脱〉〈菩提〉に関わる『Abhisamaya』の偈、及び Haribhadra 注に対する『Durbodha』の注解を追うことによって、その特色の一端を伺ってみたい。『Abhisamaya』第4章 56～58 偈は、〈得菩提〉の教理的可能性に関わる議論を説くが、まず、知慧の劣った反論者の側からの疑問の提示として、

（修道で積集されるところの）ものは離言であって、（所対治の）損害も、（能対治の）増大もありえない（と『般若経に説かれる、それなら）修（bhāvanā）という道によって何が損害され、何が得られようか // 56 //

と説かれる。この詰問の内容を Gser gliñ pa は、Haribhadra の言葉を敷衍した形で、

「もし煩悩が自性上空性の性質であるなら、その（煩悩）は存在しないのであるから修習して何になろう、また、真実に自性があるなら、その自性を他に変えることはできないから、この場合にも修習が何になろうか。いずれにしても、決択の支分などとしての修道は無意味である、と考える……」⁸⁾

と云い、また、この様な劣慧の人達は、

「決択の支分などの道は、世俗上有るのであって、因果関係として適合する次第 (anupūrvā) を理解しない人々」⁹⁾

であるが、これに対する応答は次の様に説かれる：

菩提と同様に、この（修道）は楽われる目的（菩提）を完成せしめる。菩提は真如を特相とし、その（真如）は、また、その（修道の）特相であると認められる // 57 //

「真実には修道はないから、修道は何ら添加されるべきもの (atīśayādhāna) ではないが、世俗上修道を説く場合に、聞などが可能である、つまり、真実には修習とその目的・所作によって煩悩を払拭し菩提を生起するという特性がないことは事実であるが、そうではあっても、瑜伽者の世俗上、事物があり、従って修習もある。だから、菩提のあるが如くに修道が（目的・菩提を）完成していくうちに、煩悩は客塵であるから、前説のような過失はない。従って、その（煩悩）を払拭する場合に能対治（修道九品）が

生ずることも矛盾ではない。」¹⁰⁾

として、前掲の第4章、2-ii, 3を引く。

次にまた、反論者からの論難として、

初発心は菩提に結びつかない、最後発心にも（菩提は結びつかない）// 58a, b //

即ち、菩提（の完成）は前あるいは後に生ずる心と結びつくのか、同時に多数の心が集まってあるのか、次第に生ずる心が菩提の因であるのか、を検討し、いずれも否定されるから菩提の完成がない¹¹⁾、

といわれるのに対して、

（般若経に）燈の比喻のあり方によって（説かれる様に、菩提の完成はあり）、（その）甚深の法性は八種である // 58c, d //

『般若経』には、“火芯は燈火の最初の出会いによって燃えるのでも、最初の炎に依らずに燃えるのでもない……、しかも、その火芯は燃える。同様に、初発心によって菩薩は無上正等菩提を現等覚するのでもなく、初発心に依止しないで現等覚するのでもない……、しかも、無上正等菩提を現等覚するでもあろう”

と説かれるが、『Durbodha』は Haribhadra 注に言葉を補い、云い換えつつ注解を進める：

「縁性を自性とする縁起の法性（因と縁に依存して生じた自性）をもって、この燈火と火芯・能焼と所焼の二者が会い（うるその）刹那に觀待し（それが因となって）“考察されない限り好ましいこと”として（世俗上）因と果の結びつきの力によって、その（初刹那）が引き起こした、添加の能力を持つ（特定の増益の力・焼くことのできる特性の）第二刹那（、第三刹那）が生ずる場合に、その時に、無因のものが滅しても（因の刹那が自性上滅しても）、因果の順序の様に、同時に（秤杆の高低の様に）生じ、滅する、それを所縁とすることによって、能焼と所焼（の関係）が有るのである。

先の刹那の様に、菩提を成就せしめる若干の事項（八現觀の特相あるいは念処などの特相）の顯現する前識に依止して（縁性を専ら自性とする縁起の法性を世俗上因となして）、その場合に、顯現の対象（眼識などの境・所取などの所対治分の特相として決定している境）を遠離する、非常に殊勝な対象（能対治の特相）を顯現する後の識が生じて、菩提を得る理（煩惱とその習気を断ずることが合理）である。」¹²⁾

という。『Durbodha』は、この様な議論の過程で、前掲の第4章、2-iv～5まで引き、「真実には因と果としてありえないが、世俗上、菩提が説かれるのである。」¹³⁾ とい、その説く方軌は『中觀莊嚴論』にまったく一致する。

次に、『Abhisamaya』第5章第20偈には、

他の人々が、諸法は実在であると主張する一方、世尊は所知障を滅し尽くしている

という、これはありえない希有のことであると私はみなす // 20 //

と説かれ、この掲に対する Haribhadra の注解は、所謂、〈外界実在論〉から〈中観〉へという教判的な修習段階を要約して述べているが、このことはすでに指摘された¹⁴⁾。『Durbodha』もこの〈無我観〉の修習階梯としての理解を踏襲している。しかし、共に、所謂〈四瑜伽地〉¹⁵⁾の如き明確な段階区分を採ってはいない。

今、『Durbodha』に随ってその要旨を追えば、

- 1) 生と滅は空であるから、世俗上も兎角と同様に、常住、アートマン、また自在神などは存在しないと考える人 (yogin) は、分別的な (ābhisamśkārika) 有身見がアートマンの依持であるから (そのアートマンが) あると見ることにすべての依持の頂点があるから、それを払拭する金剛結跏趺坐などによって修習を始めるのである。

彼 (yogin) は、〈アートマンはないが、蘊などとしてのみある〉という“外の仏教者”の定説に基づいて、分別されたアートマンへの執着を捨てて、縁起生であり、生滅を属性とするものを所縁とする。即ち、世俗上、生滅の属性があることは世間に周知であるから、その俱生 (sahaja) の有身見の依持を所縁とする。

2. この俱生の有身見の依持としての蘊などを払拭するために、所謂、青とその知が同時に認識されることが定まっていることによって、このすべてが唯心である。即ち、〈外界の対象は無感覚であって、顕現は不可能であるから、存在しない〉と認識して、外界がなければそれを能取することが不合理であるにもかかわらず、生の最初からの連続的な積重とその習気を持った自心不二の形象に、(なお) 能取の形象を執着している (yogin) は、前と同様、外界の対象を所縁とすることが不合理であるから、その対象への執着を払拭する。
- 3) その後、また無形象の知は対象を能取することが不合理である。所取がなければ能取はないと定んで考えられる。その後、『唯識三十頌』27偈に説かれる様に、所取の形象の性質も唯心であり、現前に分別された形象も唯心ということになると不合理であるから、能取の形象を性質とする vijñapti-mātra 自体も捨て去られて、結局、所取・能取は空であり、決択分の識のみが、アートマンなどの能取を離れ、不二を本性とする自証として存在する、と決定する。
- 4) その後、『六十頌如理論』19偈に説かれる様に、この識のみも心心所の集まりから生じたものであるから、幻の様に本体がないものである。自証としてあるものであるから否定され得ないけれども、因と果の本性として不適である

から空であり、真実として専ら有・非有・その二者・非二者という分別判断の本性が捨て去られていると修習し、『量評釈』III. 285 偈に説かれる様に、修習の最勝究竟の段階においては、丁度異生の人々の宝珠や銀や鏡などの映像の知が〈一・多などとして空〉であって、かつ明瞭に顕われる様に、所取などすべてを離れ、無明を離れた、欺くことのない自証がどの様にでもあれ生じた時に、所知障は捨て去られる¹⁶⁾。

更に、次の21偈は、他の論書にも龍樹の作として引かれているが¹⁷⁾、

ここに、取除かれるべき何ものもなく、増加されるべき何ものもない。真実を正しく見る、真実を見て、解脱する // 21 //

と述べられるもので、『Durbodha』はこの偈に対する復注を次の様に結んでいる。

「我々の主張分に従えば、一切法は如幻であり、従って、煩惱などの幻を道の幻をもって滅するのであるから、真実の存在に触れる所対治と能対治たるものはない、それ故に、我々に〈解説がありえない〉という過失はない、との意趣である。」¹⁸⁾

ところで、サキャ派の G-yag ston (G-yag phrug Sañs rgyas dpal) (1350?-1414) は、その《Abhisamaya 注解》において、中観派の〈世俗言説に関する建立〉の面から Mdo-sde spyod pa, Rnal hbyor spyod paḥi dbu ma pa, Hji g rten grags sde spyod paḥi dbu ma pa に分け、更に前二派を Svāntarika (一切法を非真実で如幻なりと主張)、後者 (一切法を真実として有る・無しと如何なる命題も立てない) を Prāsaṅgika に配当する¹⁹⁾。

今、しばらくこの分類に従えば、『Durbodha』は、これまで見てきたところから、前者に属するということができる。

1) 羽田野伯猷チベット・インド学集成、第二巻、243, 274頁。2) Toh No. 5173, 3a⁴。3) 西岡祖秀『ブトン仏教史』目録部索引II, p.51。4) 宗喀巴著、善説金珠、248, 292頁等。5) サキャ派全書 Vol. 13, 50, 14⁶。6) Toh No. 3948, 259a³-Ota No. 53, 44, 298b⁵ も『Durbodha』に対応を見出しえない。7) 「五身正智主」(大正20, 809c)。8) D. 212a²⁻³, P. 240a⁵⁻⁷。9) D. 212a⁷ P. 240b³⁻⁴。10) D. 212b⁴-3a¹, P. 241a²⁻⁵。11) D. 213a⁴-b⁴, P. 241b¹-2a²。12) D. 214b⁷-6a¹, P. 243a⁷-4b³。13) D. 216a², P. 244b³⁻⁴。14) 講座大乘仏教7, 梶山雄一, 68-9頁。15) D. S. Ruegg, The Literature of the Madhyamaka School of Philosophy in India, pp. 122-3. なお, p. 110 参照。ちなみに, Lcañ skya の『Grub mthaḥ』には, この Gser gliñ pa について, 「Gser gliñ pa より伝わる blo. sbyon に関する見解の歩みは, Alikakāra-cittamātra の見解に合うようだ。」(塔 15b⁴⁻⁵) といわれている。16) D. 230a⁵-1b⁵, P. 260b⁴-2b⁷。17) 『Abhisamayālamkāra』の三身説と四身説, 印仏研, 34-1, (97) 頁。18) D. 233b⁴⁻⁵, P. 264b²⁻⁴。19) G'YAG TIK SERIES, Vol. 2, 207⁶⁻⁸。

〈キーワード〉『現観莊嚴論』, Gser gliñ pa, 『Durbodhāloka』。

(東北大学文学部助教授)